

奈良・藤原宮跡
ふじわらきゅう

- 1 所在地 奈良県橿原市高殿町
- 2 調査期間 第一四二次調査 二〇〇六年(平18) 四月～七月
- 3 発掘機関 奈良文化財研究所都城発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 巽淳一郎
- 5 遺跡の種類 宮殿跡
- 6 遺跡の年代 飛鳥時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

今回報告する調査は、藤原宮大極殿院・朝堂院地区の再調査の九回目にあたる。対象地は朝堂東第四堂と東面回廊で、南区(二四二次)と北区(一四四次)の二つに分けて、計二〇二四㎡を調査した。検出した主な遺構は、藤原宮以前の古墳周濠・落ち込み・溝、藤原宮期の朝堂院東第四堂・東面回廊とその関連遺構、平安時代の土坑である。以下、木簡の出土した南区(二四二次)の東面回廊の調査概要にしばって述べる。

東面回廊の基壇は完全に削平され、西雨落溝SD九〇〇二、東雨落溝に先行する下層の造営時の溝SD九〇四〇、足場穴四基を検出するにとどまった。また回廊よりも東方で、造営時の整地土によって完全に覆われた南北大溝SD九八一五と、その西側に接する土坑

SK一〇五〇五を検出した。

木簡は、南北溝SD九八一五から削屑一点が出土した。SD九八一五は幅約二m深さ〇・四mで、造営時に生じた廢材(瓦片・木屑など)を含む。この溝はすぐ南の第二二八次調査でも検出しており、木簡五〇〇〇点以上が出土している(本誌第二七号)。それによれば、大宝年間(七〇一～七〇四)の木簡が主体を占め、大宝三年(七〇三)の紀年銘木簡も含まれていることから、東面回廊の完成は大宝三年以後まで遅れる可能性が高まっている。

8 木簡の釈文・内容

(1)

□□

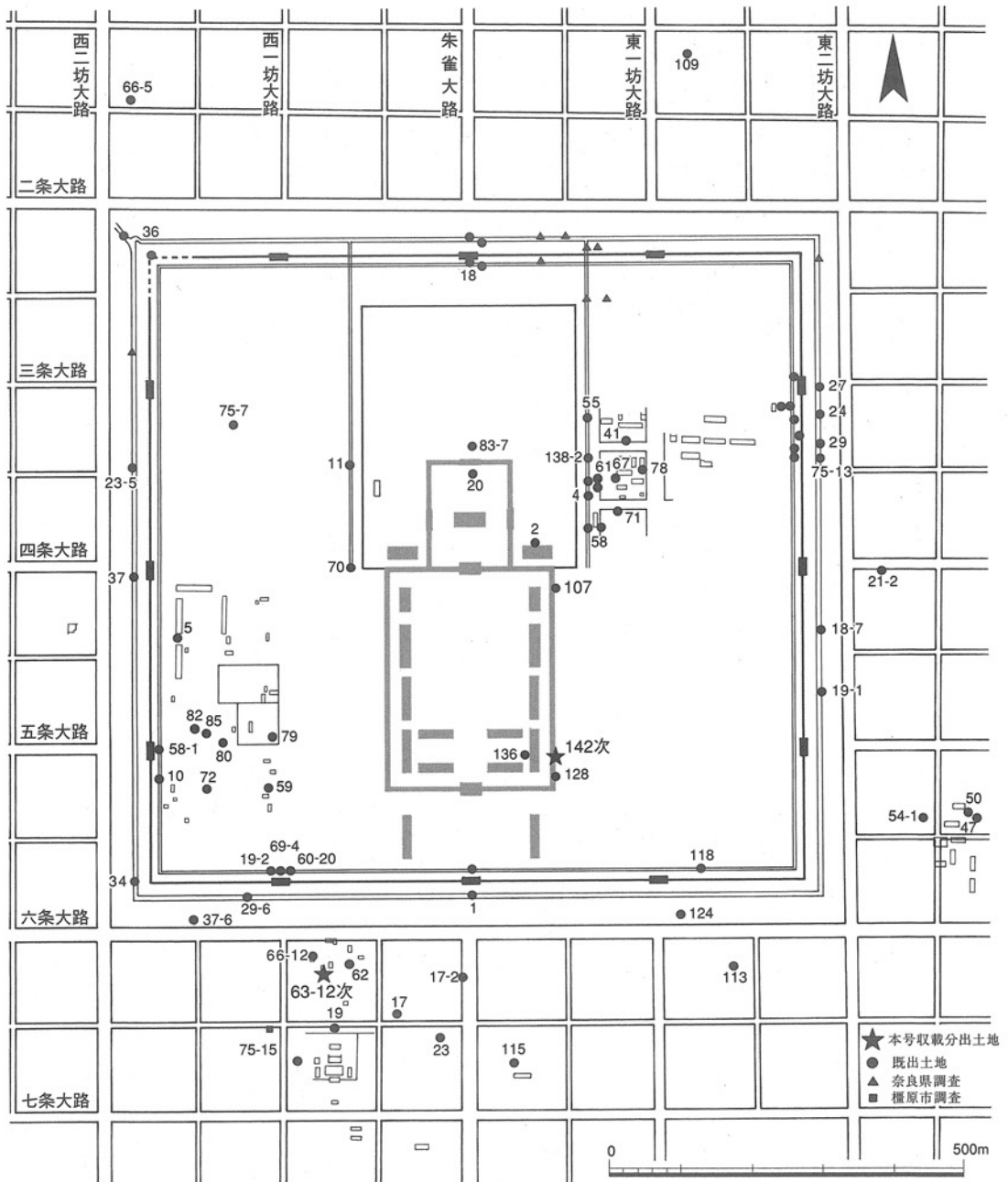
160

9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇七』(二〇〇七年)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』二二(二〇〇七年)

(市 大樹)



藤原宮跡及び周辺木簡出土地